**コンクリートの島／*Concrete Island*（1973）／J・G・バラード（大和田始・国領昭彦訳）／NW—SF社（1/31刊・¥1,400）**

ロバート・メイトランドが漂着した〝島〟は、ロンドンの高速道路に挟まれた無人の三角地帯である。ある日、ジャガーを飛ばして高速道路に乗り入れたメイトランドは事故を起こし、島に落ちてしまう。すぐに出られると思ったのもつかの間、彼はさらに暴走車に撥ねられ、自力で脱出できなくなった。だが島には、やはり社会から取り残された不具の男と若い女が住んでいた……。本書は、『クラッシュ』『ハイーライズ』とともに、七〇年代のバラード三部作を構成する作品である。

これら三部作をよく読んでみると、バラードの意図は、異様な心象風景を創造した六〇年代の三部作とどこか共通している。世界が原始に回帰していく『沈んだ世界』と、人々の意識がユング的に階層化され、退化する『ハイーライズ』。本書の登場人物などは『燃える世界』を思わせる。テクノロジーのありようは、その社会によってすべて異なっている。イギリスでは、現代と過去との対比が著しい。バラードは、その社会情況をこの三部作に微妙に反映させている。宇宙的広がりを喪失したように見える世界も、そう考えると旧三部作同様、深みを増していくようだ。（俊）